

学会の活用価値のさらなる向上を目指して



前 一 廣

このたび、竹内会長の後を受け、2014、2015年度の会長を拝命することになりました。多くの会員の方からのご支援を賜り、その重責をひしひしと感じております。

さて、当学会は、3年前に75周年を迎え、Vision2023のもと新たな発展へ向けて展開しているところでありますが、基本は会員諸氏の活動にありますので、この2年間は「**会員が快適かつ有用に、活動・活用できる学会**」を目指すことを基本方針としたいと考えています。

すでに会長立候補に際しての抱負、運営方針で述べさせて頂きましたとおり、学会のさらなる価値の増進を目指し、(1)産学連携を強みとする学会の特質強化、(2)日本における学のポジションの再構築、(3)国際的活動の定着、(4)本部/支部/地区懇話会の連携醸成の4項目を設定させて頂きました。この2年間でできる限り一つ一つ取り組み、一昨年3月に提示されたVision2023を遂行するための環境を醸成していきたいと考えております。それぞれの課題に対して、本年度は以下のような具体的な活動を推進したいと考えています。

項目(1)は本学会の芯となる部分の増強に関するものです。本会発展の最大の鍵は、人材育成と化学技術イノベーションの両面での産学連携にあると考えています。学生から産業界中堅までの人材育成をシームレスに繋ぐ活動として、すでに施行されている人材育成プログラムの着実な拡大に加えて、シニアのエンジニアや先生方の知識、経験を、現役世代(特に若手企業正会員)へ還元する仕組みを検討していきたいと考えています。一方、戦略企画センター、産学官連携センターを中心に、Vision2023で提示されている化学技術イノベーションメニューを、フェーズ、ベクトルごとに整理し、これらを効果的に具現化する仕組みづくりを進めたいと考えています。

項目(2)は「学」としてのプレゼンスの増強に関するものです。生産技術に係る人材の高まるニーズに反して、全国の化学工学系の研究室は減少傾向にあります。生産技術人材を確保するには一定数以上の化学工学系教員の確保が必須であります。この一支援策として、産業界での公的認定等を考慮した化学工学研究の新定量評価指標の策定に関する検討を開始したいと考えています。将来的には、これらを化学系学界に浸透して化学工学研究の評価の向上を目指したいと考えています。また、日本学術会議会員復帰のための布石を打つべく、他化学系学会との連携を図りながら、学術領域でのプロセス工学の地位の安定化に努力していきたいと考えています。

項目(3)はグローバル人材育成への対応に関するものです。当学会では、ここ数年の改革で国際的活動は充実しつつありますが、英文誌の課題など、まだ発展途中の状況です。真の「国際化」とは、日本国内での会員諸氏の活動が国際

Toward a Further Improvement in Value of SCEJ

Kazuhiro MAE(正会員)

1980年3月 京都大学工学部化学工学科卒業

1982年3月 京都大学大学院工学研究科修士課程化学工学専攻修了

1982年4月 (株)神戸製鋼所化学研究所勤務

1986年10月 京都大学工学部 助手

1992年5月 京都大学博士(工学)取得

1994年3月 京都大学工学部 助教授

2001年2月 京都大学工学研究科 教授(化学工学専攻)

現在に至る

連絡先：〒615-8510 京都市西京区京都大学桂

E-mail kaz@cheme.kyoto-u.ac.jp

化されていることにあると考えております。これを進めるために、部会を中心とした国際シンポジウムの奨励や諸外国学会との共催事業の推進など、正会員が国際的に情報を発信し収集する魅力的な場として活用できる環境を整えていきたいと考えています。

項目(4)は全国の会員の方への均等なサービス提供に関するものであります。当学会は伝統的に地区懇話会、支部を中心とする地域での密着した活動によって支えられてきました。7支部体制に完全移行して15年が経過し、さらに発展する時期にあると考えています。各支部での会員への魅力的なサービスを均等に実施するために、地域CTにて支部の役割を再度吟味し、各地区懇話会、支部の独立性を担保しつつ、人とモノ(知的資産、情報など)のネットワーク化によって、効率よく支部運営が実施できる体制を支援していきたいと考えています。

これに加えて、日本の中で総合的にプロセスを扱う唯一の公益法人として、福島原発を始めとする多難な課題に対して真摯に考えていきたいと思っております。現在、東北地域で直面しているプロセスに関する多くの課題に対して最も専門性を有する本学会が適切かつ客観的な解決案を提示することは責務と感じております。これには技術以外の多くの壁があることも重々承知しておりますが、プロセス技術を標榜する学会として、レポートを纏め公表していく作業も進めたいと考えています。

以上、小生が考えていることを述べましたが、会長は会員諸氏から一時的に公的な学会の纏め役を委託される職であり、公明正大に維持発展させていくことが役目と考えており、上で述べた内容も、より良いものへと柔軟に修正すれば良いと思っております。また、2年間でできることは限られております。しかし、「革新なくして発展なし」という信念で、会員諸氏とともに新展開への道筋をつけ、一歩でも魅力ある学会として次世代に橋渡ししていきたいと考えております。同時代に同じ学会に所属しているというのも何かの縁です。是非、会員諸氏の積極的な学会活動への参画を期待しております。